

艦隊格闘士これくしよ
んツ！！

葉隠 紅葉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

深海からやってきた化け物『深海棲艦ツ！』

奴らに対して近代兵器は意味をなさない

銃も爆弾も、護衛艦も

近代科学すべてが無力となった時、現代人である我々に反抗する術はない

否ッ！

我々には奴らがいるだろう！

『呼ぶしかあるまい…：グラップラーを』

これはグラップラーと呼ばれる格闘士達が
深海棲艦へと立ち向かう姿を記録したものであるッ！

目次

第4話	第3話	第2話	第1話
22	14	5	1

第1話

徳川邸、それは一部の闘士における聖地である。そんな聖地の中にある広さ30畳にも及ぶ巨大な和室の中では一人の老人が胡坐をかいて座っていた。老年とよべるほど老いているその人、徳川光成は目をぎらつかせ、目の前の男たちの会話に聞き入っていた。彼は静かに着物から煙管を取り出し口へと咥えこむ。

とある一人の陸上自衛隊員が震えて言葉を紡ぐ。額に大きな汗を浮かべた彼は自身の緊張を隠すこともできないまま、話し続ける彼。そんな男の報告をその部屋にいる十数人の男たちが聞き続ける。開き放たれたふすまの陰から夕暮れに沈む都会の喧騒が見え出していた。

「で、ありますからして…その…」

「では何かな、君の言う通りだとすると…化け物が現れたと?」

「そ、そう表現するしかありません…あれはまぎれもなく…化け物でした」

陸上自衛隊である彼は接触した化け物の報告をすべくここ徳川邸へと招集されたのであった。突如襲来した正体不明の、海からやってきた化け物に部下である自衛隊員たち10名を殺されたその自衛隊員、田川一等陸士は声を震わせながら答えた。

「いい加減にしろ！」

「し、しかし……！」

「我々が聞きたいのは事情である！。正体不明の化け物が自衛隊員を10名も殺したなど誰が信じられる！」

スーツを着た男の罵声が部屋へとこだまする。それを皮切りに報告をしていた男性隊員を非難するように罵声が飛び交った。そんな男たちを一括するかのように、煙管が火鉢へとたたきつけられた。

キンとなる音に対して男たちは会話をやめて一人の老人を黙って見つめた。その老人は煙管から煙を一吸いすると静かに、まるで語り掛けるようにゆっくりとしゃべりだした。あぐらをかいた老人は天井を見上げながら言葉を紡ぎだす。

「儂が君をここへ呼び出したのは……君の報告が非常に興味深かったからじゃ」

「御、御老公……私は嘘などついていませんッ！奴らが海から這い出るようにして現れて……」

「しかし写真の一枚もないのでは国家としては信じられまいて。ましてやそれが銃弾も爆弾も効かない敵となるとなおさらな」

「カメラが使えなかったのです！電子機器の一切が操作不能になったせいで……」

徳川光成の言葉に男は悔しそうに震えた。この人の言うとおりだ、写真の一枚もない

のでは上層部が信じられるはずもないのも無理はない。だが事実なのだッ!

奴らの前では一切の電子機器が使用不能になってしまった事は。自身もまたスマー
トフォンでの撮影を試みたがあの人型にむけてカメラを向けたとたん、画面が暗くなり
壊れたようにノイズを発してしまったのだ。

部下が狂ったようにあいづらに向けて発砲したが…そのすべてが無意味であった。
まるで肌の寸前ではじき返すように、自動小銃の弾丸を跳ね返してしまうのだ。もしや
奴らには現代兵器は通じないのでは? そんな恐ろしい予感をつい持つてしまう田川。
そんな彼に対して徳川は語り掛けた。

「信じておるとも田川君、実はな…君と同様の報告が2件もあるのだ。だからこそ我々
は君を呼び出したのじゃ」

「な…!?!」

「すでに東京都のとある無人島3つを襲撃され…ついに先日、人的な被害がでたのだ。
だからこそ今のうちに対策を取らねばならない…無論化け物云々を信じていない者も
いるがな」

「しかし御老公…ならばなおさら自衛隊が動くべきでは」

「自衛隊の名は重い…その意味が君ならわかるだろう」

「……」

眼鏡をかけたその政府高官である男性はその意図を理解し押し黙る。自衛隊を派遣するだけでマスコミからのバッシングが飛び交うこの時勢である。ましてや国家の防衛生命線である自衛隊員が負けた、などとの風潮が出てしまえば。文字通りの国家存亡の危機へとつながってしまう。

自衛隊が動くのは最終手段。そうでなければ国民に対する示しがつかないのである。だからこそ、必要なのだ。自衛隊に匹敵するほどの武力を持ち、自由に動かせる戦力が「領域外には領域外の生物をあてるしかあるまい」

「つ、つまり…例の民間人たちに調査させると？」

「呼ぶしかあるまい…」グラツプラー”を、な」

にやりと笑みを浮かべる御老公。その表情はまるで少年のように無邪気な笑顔であった。老人は煙管を置くと静かに傍らに置いてあるお茶を飲みだした。

第2話

霧雨島、それは東京都の南西から約800 km離れた太平洋上にある島である。海流の問題からマダイやシマアジといった回遊魚が豊富に暮らすその島。島上には乾性低木林が生い茂る、閑静な島であった。そんな島を現在、無数の化け物たちが攻撃していた。「ギヤギヤ・ギヤギヤギイ」

海面から浮上してくる魚型の化け物、深海棲艦のイ級が島周囲への攻撃を初めて既に30分は経過した。なおも彼らの攻撃は激しさを増すばかりであった。

爆撃の音が響く。これで四度目となる無人島への襲撃であった。魚の姿をした深海棲艦達はその島の周囲へと攻撃を繰り返す。まるで土壌を汚そうとするように、彼らは執拗に海から大地を攻撃し続けた。

そんな爆撃の連続。

やがて爆撃の音そのものが止みだした。

ふと訪れる静寂の瞬間、そのまま深海から何かがスツと姿を現し始めた。海面から身を持ち出すように、とある一人の深海棲艦が海から浮上してくるではないか。目を凝らしてよく見ると…それは女のような姿をしていた。それも年若い女性のような姿をし

ているのが見て取れた。

「……」

それは、周囲をきよろきよろと見渡し、敵影がないことを確認するとのそのそのろく歩き出した。重装である両手を大地へと突くように彼女がどしんどしんと歩き出すその姿はまるでサイのように重厚で恐ろしかった。

軽巡ツ級。別世界においてはそうよばれる彼女。それはあまりに異様な怪物だった。10代後半の少女のようないでたちをしている彼女。

彼女は自身の頭皮をすっぽりと覆いかぶさるように黒いフェイスヘルメットをしていた。何よりも目立つのはその両の掌だろう。自身の身体にも匹敵するほど巨大なその手はあまりにも『異常』であった。

「……」

小さく唸る海の化け物。彼女はきよろきよろと周囲を見渡すとそのままのしのと島の中心に向けて歩き始める。四度目となる地上進行作戦は決まって同じように行われるのであった。

第一作戦にて海上艦による地上への爆撃

第二作戦にて二足歩行型深海棲艦による地上への『巢』の建設

深海棲艦による作戦は決まってこのように行われていた。特筆すべきは彼らが必ず

地上へと進行するフェイズが存在するという点だろう。それがなぜかは分からないがこれまで、これからも深海棲艦はそのように行動するのだ。

現状、深海棲艦が海上にいる場合はあらゆる攻撃が無力化されてしまうのである。バリアのようなもので攻撃そのものが無効となってしまうのだ。ましてやその脅威を撮影しようにも、電子機器の類は一切が故障、または使用不能となってしまうのだから。これがどれほど恐ろしい事かこの段階ではまだ、政府はそれを理解できないでいた。

深海棲艦

人類史上最大の敵

その一端の逸物がそこにはあった。

いつも通りの仕事である。彼女、ツ級はこれまでと同じように地上を歩いていく。地上を震わすように歩き続ける彼女。都度四度目となる進行作戦の最中に、「それら」は現れた。彼女の背後から一人の男が現れた。

地上に掘った塹壕から隠れるようにして一連の行為を盗み見ていた彼らは不穏な気配を感じ取る。このまま何かをさせてはまずいと、彼らの本能が告げたのだ。そうして二人は砂浜をけるようにして地上へと飛び出した。

男は：否、格闘士は背後から駆け寄ると

そのツ級に対して肘鉄をくりだした。

「やるじゃねーか加藤!!」

「黙ってる末藤！油断をするな」

加藤清澄

末藤厚

神心会から放たれた

二人のグラップラーであった。

最初に仕掛けたのは加藤清澄であった。神心会空手三段、デンジャラスビーストとまで呼ばれるほどに身に着けたる野獣性をもって彼はかの敵へと襲いかかった。ツ級の頭から途端に鳴り響く甲高い音。投擲物がツ級の顔面へとヒットする。

こぶし大のサイズの投石、である

たまらず呻くツ級に対して彼は即座に敵への間合いへと迫りゆく。走りながらなおも次の一石を拾い、掌に収める加藤。そうして彼は全力をこめてその必殺の一撃を彼女の顔面へと叩き込んだ。

メキリ

ツ級のヘルメットが握りこまれた石によって音を立てる

完全な一撃。かつて死刑囚スペックが花山薫に対して叩き込んだのと瓜二つの近接攻撃である。渾身の力を込めて振り下ろされる握槓と石による一撃はたやすく人間の命だつて奪つて見せるだろう。

そう

相手が深海棲艦でなければ

「アア…」

「まったくよお…まるで効いちやいないって事かよ…」

衝撃もなんのその、自身の頭を軽く2、3度振るツ級。ただそれだけであつた。まるで眠気を覚ますためにだけあたまをふるように。加藤の一撃はまるで効いてはいなかつたのだ。

「そこをどいてな加藤」

思わず額に汗を浮かべる加藤。そんな加藤に対して末藤が声をかけた。トレーニング用のズボンとタンクトップに身を包むその格闘士。

末藤は懐からホルダーを取り出すとかちりとそれを開いた。掌にすつぽりと収まるそのサイズ。その中にはなんと…彼の歯形を模した何かが入っている。彼はそれを手に取る。ズシリと重みを感じるそれを手に、彼はそれを自身の口腔へと収めた。

「ま、まさかそれは…」

「テンプレート、さ」

ニヤリとほくそえむ末藤。それはまぎれもなく野獣の笑みであった。自らの凶暴性を隠そうともしない行為に思わず唾をのむ加藤。

テンプレート、とはマウスピースのようなものである。自身の歯にかぶせるようにして身に着ける、歯専用の武装である。自身の歯形にフィットさせた樹脂をかみしめることにより頭部と脊椎の一体化を促す。端的に言えばタフネスを増強させる効果があるのだ。

しかしそれだけではない、テンプレートの最も恐ろしいのは脊椎の配列を正常化させることによる身体機能の上昇ぶりにある。その比率ツ！驚異の30パーセント！

想像してみてほしい、身長205cm体重130kgの巨漢とも呼べる格闘士がさらに30%にも及ぶ攻撃力を手にするというこの意味を。その破壊力の恐ろしさを。だが、そんな彼に対して思わず加藤は声を荒げてしまう。

「歯医者に行くのを怠ったか末藤ツ！」

相棒である加藤から飛ばされる罵声。そう、テンプレートをはめたということは歯列が悪いということに他ならないツ！

そんな彼に対し末藤はニヒルな笑顔で答える。末藤は首をこくりと鳴らしながら静かに深海棲艦へと歩み寄った。

「いいや違う…パーフェクトナチュラルさ」

「ッ!？」

ほほ笑む末藤、そんな馬鹿な、目を見開いて驚く加藤。なんと末藤の歯は…見事に整っていたのであった。範馬刃牙の如き見事な歯並び。今、そこに、特注製のテンプレートがはまり込む。

末藤厚は学習していたのである。自身と一流格闘士の間にある差に。自身と範馬刃牙という男の間にある恐るべき戦力の差に。

自身は劣っている

ならばそれを補えばよいと

食生活を、鍛錬を、精神を鍛えなおし続けた彼。

歯医者に通い詰めた事で手に入れたパーフェクトナチュラルパワー

さらに特注で作成したテンプレート

この二つを掛け合わせるにより更に50%の身体機能上昇を手に入れた末藤。彼は笑みを深める。まるで獣のように鋭い眼光で眼前の敵をにらみつけた。

「徳川の爺さんから話をもらってよお…チャンスだと思っただけ、きつと面白れえ戦いができるってな」

「ア…ア？」

「この戦いを通して俺は成長してみせる…もう負け続けるのはごめんだぜッ!!」

そう、調査を命じられた神心会の人員。彼らは徳川翁の命令で付近の島へと潜伏しているのであった。彼らが再び地上へと侵略すると見た翁の手によって、付近の島々へとまんべんなく敷き詰められた神心会による強力な殲滅包囲網。

ほかの島でも襲われている所があるかもしれない。

——— どうでもよい ———

目の前の未確認生物の調査が必要だ

——— くだらない ———

彼は歩み続ける

それこそが強者の在り方だといわんばかりに

彼は無防備に、その深海の化け物へと歩み寄る

なぜならば己は

自分は

「格闘家の意地だッ!!舐めんなよ化け物ッ!!」

そうだ、すべては些事だ

頭で考えることなど他人に任せてしまえばよい

ここには二人の闘士がいて

目の前には強者がいる

わかつているべき事などそれだけで十分なのだから。そうして末藤は動き出す。大地をかけんばかりに、唸り声をあげながら。そうして彼は渾身の一撃を化け物へと繰り出す。

はじけ飛ぶような轟音が

砂浜へとこだました。

第3話

時がたつ。二人のグラップラーによる闘争が開始されてから30分が経過した。

「はあはあ……」

「ば、化け物が……」

二人のグラップラーによる熾烈なまでの攻撃に対しツ級は平然としていた。恐るべきことに空手による打撃はまるで効いていないのであるツ！加藤も末藤も空手の有段者であり決して打撃攻撃の質が劣るといふわけではない。

がッ！

それでもなお奴らには届かないッ！

「ア……アッア」

「畜生、こつち見て笑ってやがるぜ」

無様だ

おかしくてたまらない

そういわんばかりのツ級の態度。彼女は頭を小刻みに振りながら確かに笑い声をあげた。ヘルメットの奥でにやにやと笑みを浮かべながら。蟻をいたぶる人間のように

悪質な笑みを深める。

加藤は声を張り上げながらツ級へと走り寄る。走り抜けながらツ級のこめかみ目掛け放つ正拳突きッ！たまらずふらつく彼女に対しさらに放つ掌底ッ！

末藤もまた加藤の連撃に合わせて攻撃を放つ。ツ級の人体らしき下腹部を狙った前蹴りに、続けざまに放つ腹部への中段肘打ちッ！見事なまでのきれいな空手技であった。それでもなお、ツ級は一切のダメージを感じていない様子であった。

それもそのはずである。深海棲艦とは第二次大戦期の艦船を母体に負の怨念を身にまとった悪霊なのである。当然、身体機能や外骨格、武装などは第二次大戦期の母体をベースとしているのである。

かつて偵察巡洋艦の経験を踏まえ、その速力性能を維持しつつも更に火力を向上させ艦型を拡大した艦として開発されたのが軽巡洋艦なのである。イギリス海軍が1912年度計画でせいぞうした軽巡洋艦の始祖、「アリシューザ級」の全長が154m重量5220トンである。

もしもこの重量、この質量を人間サイズへと変換したらならば、それはとてつもない脅威であると言えるだろう。無論、5220トンがそのまま質量として残るわけではないがそれでもはるかに恐ろしいまでの密度をもって兵器としてよみがえったのが深海棲艦なのである。

閑話休題、ともあれここで重要なことは打撃技が通用しないということである。汗をだらだらと流す加藤と末藤。そんな彼らをあざ笑うようにツ級は平然と二足歩行のまま彼らを見下した。

「ア…ザ、ザコ…」

「ツ!？」

「カトウ…スエドウ…ザコ…」

「こ、こいつ…っ!？」

突如言葉を話し始めるツ級。彼女が装着したバイザーの一部が跳ね上がり口元があらわになった。そこから見える深海棲艦の素顔は少女そのものであった。彼女、ツ級はおかしくてたまらなるとばかりに笑い声をあげて目の前のグラップラーを侮辱し始めた。

体をくねらせて悦にひたるツ級。彼女の笑いによつて左右に備えた重量級大口徑武装腕が地面へと押し付けられる。年若い少女に武功を笑われるツ!それ以上の屈辱がグラップラーにあるだろうかツ!!

「加藤…俺はいま最高にむかついてるぜ」

「奇遇だな…俺もだよ」

再び立ち上がる加藤。れは闘士をギラギラと燃やしながら目前の敵をにらみつける。

末藤もまた、悠然と両こぶしを掲げてファイティングポーズを取り始めた。

「いつまでたつても追いつけない自分にッ！」

「負け続けるてめえ自身に！」

「一番ムカついてんだよオツツ!!」

「~~~~っ!?!」

加藤による前面への、末藤による背面からのタックルをもらうにうけてしまうツ級。ダメージこそないものの汗だくの男性に体を押し付けられるという不快感に思わず顔をゆがめるツ級。そのすきを逃さんとばかりに加藤は声を張り上げた。

「末藤オ！2分時間を稼げッ！」

「加藤……」

「館長から学んだアレをあいつにぶつけてやる……だからよオ……！」

「任せろオ！」

末藤もまた、彼の要望に答えた。末藤は全力で彼女の体にしがみつく。狙うは背面からの首元であるッ!!

「~~~~ヤメ……口……」

「ほお……化け物もここが弱いのかい」

裸締め

リア・ネイキッド・チョーク

対象の首に片腕を回し、さらにもう片方の腕でひじの裏や上腕のあたりをつかみ行う最強の締め業である。これによる対象は呼吸すら行うことができなくなり身動きが取れなくなる。殺人すらたやすく行える完全な禁じ手、である。

「ウオオオオオオオオオオツツ!!!」

「ガツ……ア……つ?!?!」

雄たけびを上げる末藤。彼は全力のパワー、文字通り自身の骨と歯を砕かんばかりの全力でもって対象の首を絞めた。

生涯で初めての体験と苦痛に思わずツ級は声にならぬ悲鳴を上げる。そんな末藤とツ級をよそに加藤は瞑想にふけていた。

想像しろ

かつて東京ドームにて放たれた必殺の一撃を

加藤は脱力した状態で瞑想を行う。この技は柔軟性とそれを準備するだけの時間、なによりもイメージが重要だからだ。彼は瞳を閉じそつと瞑想にふける。

戦場の只中にいるとは思えぬ姿。不思議と心臓の鼓動が落ち着いているのをそつと加藤は自覚した。ああこれはきつと、戦友が俺の背中を守ってくれているからだ、彼は脱力した姿を維持したまま理解する。

そつと彼は自身の右腕を掲げた。掌は決して固く握らない。まるで赤子のように穏やかに、ただあるがままに。

まだだ

まだ足りない

極上の一撃を放つためには、脱力こそが必然。五体の隅々が解けていく。まるでドロドロに溶かした石油のように熱く煮えたぎる闘志を自身のマグマへと変換させていく。

想像しろ

自身の腕が多関節になっていく

空想しろ

自身の腕がまるで鞭のように柔軟になっていく

かつて神心会館長、愚地克己が放ったマツハ突き。あれを放つことは到底無理だと思った。無理だと思ったからこそ、挑み続けた。皮膚がやぶれ、血で胴着が真っ赤に汚れても、なお挑み続けた。

習得が無理なら模倣だけでも。それすら無理ならせめてあの輝きの1000分の1だけでも得たい。そう願ひ末藤と加藤は歩み続けた。一流のグラップラーには程遠い実力だと自覚してなお、あがき続けたのだ

末藤も俺も馬鹿だと思つたさ

かないっこない背中を追い続けて

無駄な努力を繰り返した

負け犬だと笑われてきた

弱者だと自覚した

それでもあがき続ける事を止めなかった

だからこそ胸を張って言えるんだ

俺たちこそがグラップラー負け犬だつて

「さあ決めちまえよ加藤…奴に教えてやってくれ」

「……」

「格闘家の誇りつて奴を……」

突如解き放たれる

末藤による裸締めッ！

たまたま姿勢を崩し動揺をしてしまうツ級に対して加藤はそつと近寄った。

そうして放つ

右腕を、振りかぶる

スパアアアーンッ!!

砂漠に炸裂が鳴り響いた。

それはまるでかつて東京ドームに響いたあの音と同じように
加藤流マツハ突きが炸裂した

第4話

鎬紅葉にとって目前の老人とはパンドラの箱のようなものだ。つまりこの人と会うという事は少々の喜ばしい事と同時に多大なる厄介を引き合うことになるという事でもある。

瀕死の愚地克己や花山薫の治療しかり、徳川翁の紹介でしたジャックの骨延長手術しかり。並みの医者では到底不可能であろう手術もこなしてきた。彼のたくましい筋肉、美しい肉体こそが彼のグラップラーとしての素質も如実に表しているだろう。

それは都会にそびえたつ高層ビルの一室であった。そのビル全体は病院となっており、各地上階にて患者はふさわしい治療を受けることができる。と評判の良い病院であった。内科、小児科、外科、耳鼻咽喉科：e t c。

だがこの階層は違った。そのビルの地下に設けられたVIPルームにて現在、鎬紅葉と徳川翁は会話を広げているのであった。

名医である彼ですら初めて遭遇したそれに言葉もでなかったのは無理もない。なぜならその生物はおよそこれまでの常識からあまりにかけ離れた生命体だったのだから。そつとついたため息が病院の処置室に響く。

「随分とまあ……奇妙な姿をしておるなア……」

徳川翁の言葉に鎬紅葉は思わず苦笑で答えてしまう。ここまで奇妙なものはこれまでの生涯で見たことも想像したこともない。これならばまだグレイ型宇宙人の方が信じられるという物だ。

自身の目前でストレッツチャーに乗せられた深海棲艦ツ級の遺体を眺めながらこの世界有数の腕を持つ名医でもある鎬紅葉はため息をこぼした。コーヒーが入ったマグカップをそつとデスクの上に置く。

「神心会の方々がこの貴重なサンプルを確保してくれたとの事でしたが」

「おおそうとも！なんでも加藤と末藤が頑張ってくれたらしいぞ」

「加藤……あのデンジャラスライオンの？」

「克己の奴が嬉しそうに言っていたよ。せっかくの技が盗まれちまったとな」

クククと嬉しそうに笑みを浮かべる御老公。彼は杖を突きながら楽しそうに愚地克己の報告を思い返していた。

そんな老人のそばで鎬紅葉が手元のファイルをめくりながら答えた。ぺらぺらと紙をめくる音が病室に響く。

「神心会のメンバーは7名が軽傷。例の加藤清澄もまた腕が骨折しましたが無事復帰が可能です」

「うむ、そしてやはりというべきか」

「この生物…ですよね」

徳川光成と紅葉は眼下の生命を見下ろした。身長165cm程度の少女のような遺体であった。全身の肌が病的なまでに青白く、頭部には巨大なフェイスヘルメットが接合されている。その頭部からはケーブルのようなもんが出ており彼女の尾てい骨と両腕の武器に対して極太のケーブルが工業機械のように溶接されているのだ。

なによりも目を引くのはやはり両腕であろう。このボディ以上に巨大な二つの腕がまぎれもなくこの生命体の腕であるのは間違いない。巨大CTスキャンにかけたところ人体の上腕骨にあたる部分が存在せず、代わりにこの巨大な武器が取り付けられていたのだ。

それは形容しがたき歪さであった。生命体の皮膚に金属を違和感なく付け替える事の恐ろしさとは。まるでつきはぎだらけの人形のようなではないか。皮膚と金属面の断面をそつと撫でながら徳川は澁面の表情をした。

「生物兵器という可能性は…」

「米国にも中国にも確認したが関与していないと。とある役人など鼻で笑っておったわ、日本人がタチの悪いジョークを話しているとな」

「…まあ例え関与していたとしても」

「馬鹿正直に答えるとも思えんがな。率直に聞きたい、専門家の目から見ればなんだ？」

徳川の鋭い眼光と問いかけであつた。そんな彼の問いかけに対して紅葉は押し黙る。2秒、3秒、たつぷりと時間をかけてようやく紅葉は口を開いた。

「わかりません」

「ほう」

「ただ言えることはこの生物はもとから、このような構造、をしていたとしか思えない点。そしてこの生物は船としての特徴を備えているという事です」

「……うん？ふ、船？」

予想外の言葉に思わず徳川翁は聞き返す。それは想定外の言葉であつたからだ。

「この足裏の部分を見てください……細かなスクリューがびつしりと敷き詰められています。さらに踵部分にはプロペラが……」

「む……なんとというか機械的メカニックじやな」

「ええ工業的メカニックです。さらにはサンプルの胃のような部位を切開した際にはどろどろとした独特の燃料……重油によく似た液体が付着していました」

「……船の燃料か？」

「私は船の専門家ではありませんが……これだけは言えます。この生命体は船の特徴を引

き継いだきわめて特殊な生命体です。現代の科学では作成する事のできない、ね」

そう告げた紅葉。彼は額に浮かんだ汗をぬぐいながらそつとコーヒーカーップへと手を伸ばす。穏やかな空調の音だけが病室へとこだました。